

# 21世紀に向けての 交通安全運動

恒成茂行

熊本大学  
医学部法医学教室教授

Shigeyuki TSUNENARI

Professor, Department of Forensic Medicine,  
Kumamoto University School of Medicine

四季折々、交通安全運動が全国的に展開されている。警察音楽隊の市中パレードの他に、幼稚園児や婦人会員が動員されて、道行くドライバーにおしぼりや手作りのマスコットを配って交通安全を呼び掛けている。この種の交通安全運動の効果を一概に否定しないが、予算消化のための硬直化した年中行事に過ぎないものも少なくないと思う。

交通安全には、自動車工学、土木工学、交通心理学、救急医学、法学など総合科学的な知識や技術が要求される。熊本大学で大学生の交通安全教育カリキュラムとして「自動車交通の総合科学」と「安全運転指導の総合講座」を開講してから早くも3年が経過した。その間、多数の学生と接したが、大学入学以前に本格的な交通安全教育を受けた学生は皆無であった。また、大学入学後に90%以上の学生が運転免許を取得しているが、平成5年から始まった自動車学校での応急救護措置の講義や実技と真剣に取り組んだ学生が少ないことも判った。

また、熊本県下の多数の高校において交通安全講話も行っている。従来の交通事故統計や抽象的な交通安全の話よりも、強烈な映像を交えた「死者からのメッセージ」の方が、交通規則を守ったり、シートベルトの着用の効用の他に、命を大切にすることをストレートに高校生に伝えることができるものである。各高校には交通安全指導担当の教諭はいるが、指導者に対する交通安全の総合科学的な研修が充実しているとは言えない状況も判った。

交通安全運動に果たす高校や自動車学校の先生の役割には、計り知れないものがある。教育をする場合に、例えば、10の知識や技術のうちから7~8を教えなければならぬ時はたいへんである。一方、20~30の知識や技術を持つての教育には余裕があり、充実したクラスルームが期待できる。しかし、現行の一日程度の散発的な研修会に出席して、肝心の先生方が交通安全教育に必要な幅広い知識や技術を確実に習得することは不可能であろう。

21世紀を見据えた交通安全対策として、まずは徹底した指導者養成プログラムの設定と真摯に取り組む必要があるものと考えます。

ちなみに、全国に先駆けて、1997年5月と6月に熊本県警交通部運転免許課と熊本県指定自動車教習所協会の協力を得て、2日間の応急救護処置指導者現任講習会を実施した。県下の自動車教習所31校を5ブロックに分けて、1校当たり約2名の受講者を募集し、地域における救急医療施設、消防施設、警察施設の見学研修と世話校における応急救護処置講習（講義と実技）の授業参観と意見交換会を行った。講習会後のアンケート調査によると、応急救護処置の周辺知識が得られ、明日からの教習生の指導に自信ができたことと好評であった。

ところで、今回の現任講習会の総経費は約百万円であり、公的な資金援助は全くなかった。全国的に展開されている恒例の交通安全運動の総予算を正確には知らないが、その数パーセントでも交通安全指導者の徹底した研修プログラムに転用されるならば、21世紀を担う若者の交通安全教育の充実に確実に貢献できるものと確信しているところである。

原稿受理 1997年8月18日